# 十三夜の月

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十三夜の月

【Ｎコード】
Ｎ２８５３Ｃ

【作者名】
浅葉りな

【あらすじ】
優等生の深山はるかは、学園一の問題児、倉田巽に恋をする。だが、彼にはとある秘密があって――

## 1、ふたつの出会い

廊下を全力疾走するなんて、僕のもう少しで１６年になる人生の中ではじめてのできごとだった。

あぁ、やっぱり、夜更かしなんかしなきゃよかったんだ！

心の中で叫びながら、限りなく直角に近い角度で左折した。

「わっ！」

誰かにぶつかってはね飛ばされる。その拍子に、トレードマークでもあるノンフレームメガネがどこかに飛んでいってしまった。

「……ごめんなさいっ！」

僕はメガネがないと、ほとんどなにも見えない。でもとりあえず、前方にある大きな影に向かって謝った。これで相手が人じゃなかったら、僕ってただのマヌケだ……。

反動で顔を上げると、相手が揺るぎもしなかったわけがわかった気がした。細身なものの、けっこうな長身だ。もしかすると、１９０センチ近くあるかもしれない。紺色の詰襟を着ているから、生徒だ。

相手は答えもせず、ただ僕を見下ろしていた。本気で人形かなにかなんだろうか。

「あの、急いでいるので失礼します」

でも、こんなところに人形が立ってるわけもないから、人間なんだろう。怒っているのかもしれない。

立ち上がって駆け出そうとした僕を、彼は押しとどめた。

身構えていたら、足もとに落ちていたメガネを拾って手渡してくれた。

案外いい人なのかもしれない。きっと、しゃべらないのにも事情があるんだ。

そのまま、彼は保健室の方へと歩いていった。
僕は気を取り直してメガネをかけた。角を曲がってすぐのところにある１－Ａ教室に飛び込む。
「深山、初日から遅刻、と……」
教卓の前に立っている先生が、独り言のようにつぶやいた。出席簿をつけていたペンで、僕の席とおぼしき場所を指し示す。
ばつが悪くって、急ぎ足で自分の席まで行く。廊下側の一番後ろ、ドアの前。真冬には隙間風で凍えることになるっていう最悪の場所だ。エスケープなんかは楽だけど、僕はそんなことしないから、あんまり嬉しい席じゃなかった。
遅刻はするし席は寒いしで、なんだか幸先が悪いスタートだ。
ぼくはこっそりとため息をついた。

「はるか、遅刻なんかしてどうしたの？　熱でもある？」
居心地の悪いＨＲが終わって解放されると同時に、ぼくのところまで走ってきたのは高木琴子だった。子供相手にするように、額をくっつけてくる。
「深山って呼んでって、なんども言ってるだろ……」
僕は盛大にため息をつく。男なのに『はるか』なんて名前だってこと、僕はけっこう恥ずかしく思ってるんだ。幼なじみの琴子は、それを知ってるはずなのに、今でも僕を『はるか』と呼ぶ。
「いいじゃない。あたし、これでも譲歩してるのよ？　はるちゃんって呼ばないであげてるじゃない」
腰ほどまでもあるウェーブのかかった黒髪をかきあげて、琴子は不服そうにくちびるを突き出した。
僕はあきらめて首を横に振る。琴子は、こうなったらてこでも動かない。
素直に負けを認めるしかなかった。ここ、私立聖都学園の幼等部

からの付き合いだから、そんなことは骨身にしみてわかっていた。
「そういえば、知ってるよね？　倉田、同じクラスなんだって」
「知ってるよ」
唐突な琴子の話題転換に、僕はこれ幸いと飛びついた。琴子は、機嫌がいいときはいいのだけれど、一度機嫌が悪くなると手がつけられない。
「あそこの、ほら、お見合い席よ、彼の席。はるか、どうせ押し付けられるだろうから、今のうちに覚えとくといいわ」
「だろうね……」
僕は厄介ごとを押し付けられてばかりいるんだ。頼まれたら断れない性格のせいもあるし、学級委員なんか毎年やらされてるせいでもある。
それでも、今回ほどごめんこうむりたいと思ったことはなかった。
倉田巽は有名だから。悪い意味で。
中等部から在籍している人間で、この名前を知らない人間はいないだろう。もちろん、僕も知っている。
幼等部からずっと在籍してるだけあって、耳にする噂の量は人より多い。
倉田は初等部から聖都に来たのだけれど、その頃からどこか人とは違ったらしい。とにかく無愛想で、こっちの言うことはわかっているらしいのに、反応は返さなかったと聞く。
そう、ひとこともしゃべらないんだ。声が出せないわけでもないのに。
そのことが、倉田を問題児たらしめていた。
「大変よねぇ……がんばってね。データが欲しいなら、新聞部の敏腕記者であるこのあたしが調べてあげるから。一回につき五百円でいいわ」
僕の肩をぽん、と叩きながら琴子が言った。口調とは裏腹に、顔がにやけている。
「おもしろがってるだろ……？」

「ばれた？」
「何年の付き合いだよ」
「忘れたわね……。あ、来たみたいよ、倉田巽」
振り向くと、当の倉田と目が合った。
山で見た夜空みたいな色をした深い瞳が僕を映している。感情のカケラさえ見あたらない目だった。
彼の美貌は、凶器になりうるほどだと思った。研ぎ澄まされたナイフの刃先のような、見るものを圧倒せずにはいられない顔立ちだ。
邪魔にならない程度に切られた黒髪が惜しくさえある。今のままでも悪くないけれど、手をかければもっと綺麗になるはず。
先に目をそらしたのは倉田だった。そして、何事もなかったみたいに行ってしまう。
「すごい……。あの倉田とガンつけあって勝つなんて」
的はずれな感心の仕方をしている琴子は放っておいて、僕はこの日何度めかもわからないため息をついた。

＊

「学級委員だし、少し気をつけてやってくれないか」なんていう、先生からの依頼形の命令が発されるのはいつかと身構えていたのに、結局それは来なかった。
そうやって緊張していたものだから、午前授業だったのにいつもの倍は疲労した気がする。
僕は重い足を引きずって寮へと向かった。
聖都学園には寮があって、中等部以上の聖都はほとんど入寮している。
僕は、自宅から通っていた数少ないうちのひとりだった。父が海外支社に転勤になって、母もついていくことになったので、今日から学園の男子寮に入ることになっている。荷物は部屋に運びこまれているはずだから、あとは寮監の先生から鍵を受け取るだけだ。

部屋番号は１０９。寮は原則的にふたり部屋のはずだけれど、ルームメイトが誰かは聞いていなかった。
誰だろう。気になる。
部屋には鍵がかかっていなかった。ちょうどいい具合に、ルームメイトは中にいるらしい。
気安い人だといいけれど――
そんなことを考えながらドアを開けた。
入ってすぐ、二段ベッドが見えた。もちろん、周りはカーテンがひけるようになっていて、中は見えない。右側を見ると、大きな窓があった。窓に向かって左右対称に机とチェストが置いてある。左側にはドアがある。そっちにはバスルームがあるはずだ。
僕の荷物は無造作に入り口近くに置いてあった。ダンボールよっつって、意外と多い。
ベッドは下のカーテンが閉まっていた。上は開いていて、私物らしきものは置いていなかった。机は、窓に向かって左側が使われている。
ルームメイトは、入り口に背を向けてそこにいた。
「はじめまして。今日からよろしくね」
ぴんと伸びた背中に向かって声をかける。
ルームメイトが、もの憂げに振り向いた。
「僕、１－Ａの深山はるかっていうんだけど……」
その顔を見た瞬間、僕は言葉を失った。池の鯉みたいに口をぱくぱくさせながら、ルームメイト――倉田を見つめるしかなかった。
手に持っていた本を僕に見せて、倉田はまた机に向かう。その背は無言の拒絶を表しているように見えた。
「……本、読んでるから、邪魔するなってこと……？」
誰にともなくつぶやくと、倉田がまた振り返って小さくうなずいた。どうやら、言葉を交わす気はないらしい。
言うことを聞くのも癪だけれど、相手の言うこと（この場合、言うことっていうのは語弊があるけど）ももっともだったから、僕は

大人しく従った。
まず、空いている机の上に、かばんを放り出す。本革製の手提げかばんは丈夫で、多少乱暴に扱っても壊れない。
僕は早速ダンボールを開けにかかった。今日中に片づけてしまわないと、明日から困ることになる。
ひとつめのダンボールには春物の服が入っていた。放課後と土日しか着ないから、量はそう多くない。気取らない、着慣れた服ばかりだった。
ふたつめのダンボールの中身は、本。文庫本やノベルスがほとんどで、何冊かマンガも入れたはずだ。この大きさなら、とりあえずは机の下に押し込めておけばいいだろう。
みっめには、日常のこまごまとしたものを入れていた。歯ブラシとか、タオルとか、下着とか。
よっつめは学校で使うものの箱。辞書とか、教科書、文房具をつめてある。
当面は、これだけあれば事足りるだろう。足りないものがあったら、家に帰って持ってくればよかった。ガスや水道は止めたけれど、電気はそのままにしてある。家は、掃除して鍵をかけただけで、ほとんどそのままにしてあった。
まず、本の入ったダンボールを机の下まで持っていこう。
僕はダンボールを持ち上げようとした。けれど、本がつめこまれたダンボールは相当の重量で、簡単には持ち上がってくれない。
もともと体力に自信のあるほうじゃないから、仕方ないのかもしれない。僕は腰に手を当ててため息をついた。
ふと、肩を叩かれる。
うしろには倉田が立っていて、仏頂面で僕を見ていた。
倉田は僕を押しのけて、いとも簡単にダンボールを持ち上げる。
僕の机の方へとあごをしゃくった。
「持っていってくれるの？」
僕はおそるおそる訊ねた。このシチュエーションだとそれ以外考

えられないけれど、倉田がそんなことをしてくれるなんて。
噂で聞いていたのとはずいぶん違う。
「……」
倉田が無言でうなずいた。
「あの、それじゃ、机の下まで運んでくれると助かるんだけど……」
今度はうなずきもせず、倉田はダンボールを机の下に押しこんだ。
僕の方に顔を向け、これでいいのかとでも言いたげな視線を向けてくる。
当然、倉田の表情は相変わらずだった。なんの感情も浮かんでいない。瞳だけが、雄弁に感情を訴えかけてきている。
「――ありがとう」
自然と、言葉がつむがれる。
倉田の瞳が優しげに歪められた。
やっぱり、倉田は噂どおりの人物じゃないのかもしれない。僕は、倉田に笑顔を返しながら思った。
なにか事情があるだけで、本当は優しい人なんだろう。
たった一度優しくされただけでこんなふうに思うのって、単純でオメデタイのかもしれないけど。
こう思えば、陰謀じゃないかって疑いたくなるような部屋割りも、悪くないって感じだし。
どうせだったら楽しい方がいいって言うのが、僕の持論。
なんとなく嬉しいような浮いた気分で、残りのダンボールを片づけにかかった。

## 2、近く遠く

先生に言われるまでもなく、ぼくはなにくれとなく倉田にかまった。もとい、倉田にかまってもらった。

倉田は笑いもしなかったし、口を開くこともなかった。
ただ、はじめのうちは僕が近くにいただけで嫌そうな顔をしていたのに、だんだん慣れてきたらしく、雰囲気がやわらかくなってきた。進歩だと思う。
そして、高等部に上がってから二週間がたった日に、それは起こった。

なんだかすごい音がしたかと思うと、食堂中が静まり返った。
食券自販機の、前で腕組みしていた僕は、人が集まりつつある一画に目を向けた。どうやら、あそこでなにかあったらしい。
とりあえずサンドイッチの券を買って、騒ぎの起こった場所へと向かう。
聖都学園は平和な学園で、表立ってこんな騒ぎが起こるなんてこと、滅多にない。だから、野次馬がたくさん集まる。
良家の子息だとか令嬢がごろごろしてるから、っていうのもあると思う。良家の人々って、僕みたいな庶民と違って、なんていうか……ゆったりとした時間の流れの中に生きてる人が多いんだよね。特に、旧家の人たちは。
「ちょっと通して」
謝りながら人の輪をくぐり抜けていく。こういうときだけは、小柄だと便利だ。
最前列に出て、僕は惨状に天を仰いだ。
倉田が立っていたからだ。ただ立っているだけなのに、怒りのオーラというやつが煙みたいに立ちのぼってそうな勢いだった。
その足もとには、ラーメンをかぶった男子生徒がふたり、怯えきった様子で倉田を見上げてはいつくばっている。片方の頬が赤くなっているところを見ると、倉田が殴ったってことだろうか。
「なにがあったの？」

小声で、隣の女の子に訊ねる。
「よくわからないんだけど……倉田くんが怒って、あの子を殴りつけたの。それで、隣の子も巻き添えになって、仲良くラーメンをかぶっちゃったみたい」
同じく小声で答えてくれた女の子に目で感謝して、僕はまた倉田たちに目を移した。
頬が赤くなっている方の子は、小動物みたいな印象を受ける可愛い（男の子に使うのは変かもしれないけど）子。少なくとも、他人を怒らせるようには見えない。
ラーメンをかぶっている子も、いかにも“良家の子息”って感じの育ちがよさそうなタイプ。
僕はふたりに駆けよって、ハンカチを差し出した。
「早く冷やした方がいいよ」
「……すいません……」
蚊の鳴くような声で殴られた子が言った。歯でも折れているのか、発音が不明瞭だった。
「いいよ、気にしないで」
微笑みを浮かべながら言って、僕は倉田に向きなおる。
「なにがあったのか知らないけど、ここまですることないだろ！」
にらみつけても、倉田はたじろがなかった。まるで、自分の正義を信じているかのように。
迷いのない視線に、逆に僕のほうがたじろいでしまう。
「とにかく、謝れよ！」
つめよって、指を突きつける。
視線がぶつかりあった。黒い、夜闇のような瞳には、ひどく悲しげな色が浮かんでいる。
周囲の人間が、固唾を呑んで見守っているのがわかった。
僕は倉田から視線をはずせないでいた。
鉛のような空気がのしかかってくる。
こんな瞳で見つめられたら、いたたまれなくなってしまう。昔か

ら、この手の目には弱い。
雨に降られた捨て犬みたいな倉田の目。なにかを訴えかけたがっているのに、それを伝える言葉を持っていないものの眼差しだった。
僕が、悪いことでもしたっていうことだろうか。
倉田はふいっと目をそらし、僕を突きとばした。
軽く突きとばしたつもりだろうけど、いかんせん、ぼくはウェイトに欠ける。よろめいてイスに足をひっかけ、ラーメンの汁ですべって転んでしまった。情けない。
視界が、一瞬、フラッシュでもたかれたみたいに白くなる。僕はテーブルの角に頭をぶつけていた。
目の端に、去っていく倉田が見える。
僕のことなんかどうだっていいんだ……。そう思うと、胸が痛かった。
それにしても、仲裁に入っておきながら、こんな無様なことになるなんて。
情けないのと悔しいのとのダブルパンチで、僕はどんな顔をしたらいいかわからなかった。
首を振って立ち上がる。照れ隠しに頭をかこうとした手が、ぬるりとした生温かい液体に触れた。
手を目の前にもってくると、赤いものが付着している。刑事ドラマとかでよく見る、血糊にそっくりな……。
すぐ近くにいた女の子が悲鳴をあげた。
耳が痛い、なんて思いながら、ぼくは意識を手放した。

＊

額に感じる冷たさに、僕は身体を縮こまらせた。
小さくうめいて、寝返りを打つ。せっかく気持ちよく眠ってるんだから、もう少しそっとしておいてくれたって……。
って。

僕はさっきまで食堂にいたはずで。
一気に思い出してから、おそるおそるまぶたを持ち上げた。
「ああ、やっと気がついたみたいだね。大丈夫かな？」
我が校の名物保健医こと（本当は、保健室のおにーさん、らしい。保健医っていうのは、なんか違う職業のことを指すんだそうだ。でも、語呂の関係上、みんな保健医って呼んでいるんだ）久保真郷さんが、ぼくを見下ろしながら微笑んでいた。
百八十センチは軽く超える長身な上、細くて腰が高いというモデル体型の持ち主である彼は、倉田とは逆にいい意味で注目の的だった。
彼の顔を見たいがために仮病を使う生徒があとをたたなかったり、バレンタインや誕生日には文字通り山ほどのプレゼントが届いたりする。
それほど可愛いのが真郷さんだった。肩にかかるほどの黒髪と、光の加減で青く見えることもある瞳は、先生って感じがしない。アイドルでもやってたほうがよほど似合う。
本人も、先生、って呼ばれるのを嫌っていて、名前か名字で呼ぶように言っているのは、有名な話。
「……深山くん？」
呆けたように真郷さんを見つめる僕を見て、彼は心配そうな声を出した。
「あー……えーっと、今、何時ですか？」
まさか見とれていたなんて言えなくて、ひと昔前のナンパのセリフみたいなことを言ってしまう。
「四時だけど」
言うと同時、真郷さんは吹き出した。
たしかに変なセリフだけど、そこまで笑うことないと思う。
顔を半分だけ出してふとんにもぐりながら、僕は恨みがましく真郷さんを見つめた。
「ごめんね、きみがあまりに可愛いものだから」

言っている方は好意のつもりでも、言われる方には悪意以外のなにものでもないように聞こえてしまうこのセリフ、真郷さんは肩を震わせながら言った。
可愛いなんて言われて喜ぶ男がいるもんか！
僕はさらに膨れた。そもそも、たったの百六十センチにも満たないきゃしゃな身体を、僕はあまり好いていない。
僕の容姿は、お世辞にも「かっこいい」とは言えなかった。
金色に近い茶色の髪と、髪と同色の瞳は、僕をおとなしそうに見せるらしい。母親似の女顔で童顔だってのもあるだろうけど。
「ところで、大丈夫？」
未だ笑いの余韻が抜けきらない様子で真郷さんが訊ねてくる。
「大丈夫です」
特に痛いところもないし、熱っぽいわけでもない。倒れたときだって、ちょっと血を見てびっくりしただけ。
僕は上体を起こしてのびをした。
「後頭部に傷ができてることはできてるけど、それは大したことないからね。貧血起こしただけだろうから。でも、念のために、病院行って検査してくること。午後の授業は、早退届出しておいたから気にしなくていいからね」
やっぱり、僕の思った通り。検査は好きじゃないけど、しょうがない。
「送っていくから、ちょっと待ってて」
真郷さんは僕に背を向けて白衣を脱ぎはじめた。
「いいんですか？　ここにいなくて」
「大丈夫だよ。それに、病院に行く途中でなにかあったらって思うと、そっちの方が心配だね」
白衣をたたんで机の上に置き、真郷さんは車のキーを振った。かちゃかちゃと、キーホルダーについている鍵が音をたてる。
「――すいません、お願いします」
僕は素直に頭を下げた。

――の倉田議員に、汚職の疑惑が浮上しています。その件について、首相は「内閣からそのようなものを出すのは大変遺憾である」とコメントしています――

「ちょっとうるさいね」

隣で運転していた真郷さんが、笑いながらラジオを切った。

政治家のスキャンダルなんて、いまさら、珍しくもなんともない。そう退屈していた心を見透かされてしまったような気がした。

「いえ……」

とりあえず、否定の言葉を口にする。

病院にわざわざ送っていってもらえるだけでも図々しいくらいだと思うのに、これ以上厚顔な行いをしたくなかった。

「遠慮しなくていいよ。そもそも、ぼくだってニュース聞きたいわけじゃないしね」

「――すいま……」

「気にしないで」

言いかけた言葉は、優しげでさえあるのに有無を言わせない強さを持った声でさえぎられた。

もしかしたら、真郷さんって意外と気が強い人なのかな……。外見は優しげだけど。

「ところで、深山くん。どうしてそんなケガを？」

言葉にしてはいないものの、おとなしそうなきみがどうして、ってニュアンスがたっぷり込められているような気がした。

事情を知らないわけはないだろうけど、信じられないって思ってるのかもしれない。

僕が意見したのは、あの倉田なんだから。

「倉田に突き飛ばされて。ちょっとケンカの仲裁に入ったつもりだったんですけど」

なるたけ軽く言って、笑って見せる。
「へぇ……偉いね」
「偉くなんかないです。結局、けがしちゃいましたし。情けないですよね」
謙遜でもなんでもなかった。僕の本心だ。
真郷さんはくすくす笑いながら、偉いね、と繰り返した。
「深山くんは倉田くんのこと、どう思ってるの？」
「――え？」
唐突な質問だった。
今の話のいったいどこから、僕が倉田をどう思ってるかなんてことが出てくるって言うんだろう。
「知らないの？　噂になってるんだよ。倉田くん、有名人だから」
疑問が顔に出てたみたいだ。真郷さんは先まわりして答えてくれた。
「噂……ですか？」
自然と、僕の声に警戒がにじんだ。
こういう場合の噂っていうのは、よくないものって相場が決まっている。特に、倉田が有名なのは悪い意味でだから、余計にだ。
「内容はヒミツだけどね」
やっぱり……。
とんでもないことを言われているに違いないんだ。ちょっとひどい程度なら、わざわざ秘密にすることもないだろうし。
「もしかして、それって、僕にも関係が？」
「まぁ、ね」
僕にも関係あって、なおかつとんでもないこと……。
なんだか怖い。どんなことを言われてるんだろう。
聞いてみたいような、絶対聞きたくないような。
「……深山くんは本当に可愛いねぇ」
苦笑混じりに言われてしまった。
僕が可愛いって。

それって、絶対誉めてない。
たしかに僕は女顔だし、分類するなら、可愛い系に入るだろうってことは、自覚してるけど。
「だって、すぐに顔に出るからね。裏表がなくっていいと思うよ」
「それって、単純ってことじゃないですか」
「そうとも言うね」
あっさりと同意されると、それはそれで傷つく。
「でも、それは深山くんのいいところだと思うよ。倉田くんが気に入るのもよくわかるね」
「倉田が？　僕を？　気に入ってるぅ！？」
声が裏返ってしまった。
あの態度のどこをどう見たら、気に入ってるなんて結論に達するんだ。
口もきいてくれないし、話しかけてもほとんど無視。今日みたいに、ケンカの仲裁に入ったってけがさせられるだけ。
嫌われてるとまでは思わないけど、好かれてるってほどじゃないと思う。
「あっ、心理学を修めた人間の言うことを疑うんだ？」
表情は変わらないのに、真郷さんは拗ねたような声を出した。
「そういうわけじゃないですけど……倉田、未だに口もきいてくれないんですよ？」
「なにか理由があるかもしれないよ。声を出さないっていうのにも、いろんな原因があるんだよ」
講義口調。
でも、ちっとも小難しくない。すっと頭に入ってくる。
「声を出さない場合と、声を出せない場合。出さないってひとくちに言っても、自分の意志で出さないことだってあれば、なんらかの圧力で口をつぐんでしまってることだってあるし。出せない理由にだって、精神的理由と身体的理由のふたつがある」
「倉田はどうなんです？」

「彼は身体的には問題はないね」
じゃあ、どうして倉田は話さないんだろう。
不便だとか、感じることはあるはずなのに。
「深山くん、そんなに倉田くんが気になる？」
「冗談言わないでください！」
叫び声は悲鳴に近かった。
「照れなくてもいいよ」
「照れてません！」
しばらく肩を震わせたのち、真郷さんは、ぽつりとひとこと。
「相思相愛」
どうしてそんなことになるんだろう……。
ちょっと泣きたくなった。

＊

寮は眠りにつきかけていた。
今は、もう十時。当然夜の。
病院で検査を受けたあと、真郷さんと食事に行ったものだから、こんな時間になったんだ。
検査結果は、異常なし。
場所が場所だけに、派手に出血しただけだった。
頭に巻いた包帯のおかげで、レストランでは注目を浴びたけど……。
「でも、おごってもらったりして、悪かったような……」
そう、真郷さんは、なにもなくてよかったって言って、おごってくれたんだ。
僕は自分の分くらい払おうとしたけど、頑として真郷さんは受け取ってくれなかったんだ。
「明日、お礼に行かなくっちゃ」
独り言をつぶやきながら、忍び足で部屋にすべりこむ。こういう

とき、ふたり部屋だと気を遣う。
消灯時間も近いし。
「……あれ？」
部屋の中は真っ暗だ。
消灯の前に寝ちゃったのかな。
着替えのためにチェストの前まで行こうとしたとき、僕を見つめる視線に気づいた。
倉田が、恨みがましい目をこっちに向けている。
静かで、底冷えするような光を宿した黒瞳は、僕だけを見ていた。辺りが闇に包まれていることも、もしかしたらどうでもいいと思っているのかもしれなかった。
倉田はなにも言わない。
でも、格言の示すとおりに、なにかを訴えかけていた。
それは、叫び。
僕は目をそらした。
あんな視線を受けとめきれない。
いそいそとパジャマに着替えて、ベッドにもぐりこむ。
ふとんの中でさえ、僕は倉田の視線を感じていた。
「羊が一匹、羊が二匹……」
意識をそらすために数えはじめた羊が、僕の耳からこぼれて、部屋がぎゅうぎゅうになった頃、眠りの小人が砂をまきにやってきた。
夢と現のはざまで、疑問のとげが指先に刺さるのを感じた。
どうして倉田は声を出さないんだろう。
どうして倉田は僕を見つめていたんだろう。

## 3、スキャンダル

問題は、壁と正面衝突したことではない。

僕は心の中でひとりごちた。
「なんだよあれ……」
と、これは声に出してつぶやく。
なんでかって言えば、僕は見てしまったんだ。
僕が入ってきた瞬間に、靴箱前に立っている生徒が、紙のようなものを隠したのを。
朝の七時半なんて時刻に、靴箱の前で、誰かに隠さないといけないものなんて、たったひとつ。
《裏新聞》しかない。
しかも、隠す相手は、記事になっている当人かもしくは教師。
と、いうことは、多分僕のことが書かれているわけで……。
おもしろくない事態だった。
そもそも、《裏新聞》っていうのはゴシップ紙。正式名称はＡｐｒｉｌ　Ｆｏｏｌっていう。
眉ツバものの記事だとか、冗談だとか、スキャンダルを面白おかしく書きたてる娯楽紙だ。
生徒学園報っていうまともな新聞の裏で秘密裏に発行されている。有料だっていうのに、生徒から絶大な人気を誇っていた。
《裏新聞》が販売されるのは、朝と放課後、靴箱前で。新聞部の部室に行っても手に入る。
「ねえ、それ、Ａｐｒｉｌ　Ｆｏｏｌだよね？　一部くれる？」
サイフを出して言うと、販売員だと思われる生徒はあからさまに顔を引きつらせた。
「いえ……その……」
視線をさまよわせ、受け答えもしどろもどろになっている。
「いいから、一部くれない？」
僕はにっこり笑って言う。
笑顔っていうのは、ある意味、感情的に怒鳴り散らされるより怖いってことを、目の前の生徒は実感しているに違いなかった。
「これはただのアンケートで……」

教師用の言いわけだ。僕には、当然、わかっていた。なにせ、僕は琴子と幼なじみ、新聞部の裏情報はけっこう入ってきたりする。
「いいから、一部くれない？」
青ざめている彼に、同じ言葉を繰り返す。
「違うんです、これは……」
「いいから、一部くれない？」
「あの……お代は要りませんからっ！」
これ以上の問題はムダだって悟ったらしく、彼は森でくまさんに出会ったお嬢さんみたいに逃げていった。
小さな貝殻のイヤリングの代わりに、Ａｐｒｉｌ　Ｆｏｏｌを一部落として。
床にひらひらと蝶のように舞い降りたＡｐｒｉｌ　Ｆｏｏｌは、トップ記事をさらしていた。
「倉田巽の恋人発覚……熱愛の相手は深山はるか……？」
見出しの意味を理解するのに、たっぷり五秒かかった。
「誰と誰が恋人だって！」
僕の雄叫びにびっくりしたらしく、登校してきた女の子が早足で逃げていくのが見えた。
普段の僕だったら、そこで、女の子を追いかけて謝っただろうけど。
今の僕にしてみれば、そんなことは些細なこと、どうでもいいことだった。
目は、黒々とした活字を追う。

あの倉田巽（１５）に現在熱愛中の恋人がいることが発覚した。
お相手の名前は深山はるか（１５）。少女のように愛らしい美少年で、幼等部から我が聖都学園に通っている生粋のお坊ちゃま。学級委員をつとめることも多い優等生。
はじめのうち、ふたりの関係は深山の片思いかに思われた。が、昨日、ふたりが相思相愛であることを裏付ける事件が起こった。

昼休みの食堂で、伊東勇介（１５）と稲葉和也（１５）が倉田に殴られ、全治三週間の怪我を負わされたという事件である。
一見、理由もなく暴挙に及んだかに見えた倉田だったが、実はその行動の裏には意外な事実が隠されていたのだ。
聞き込みの結果、被害者のふたりは深山のことを「薄汚いホモ野郎」などと罵っていたことが判明。これは、少々やりすぎのきらいはあったものの、倉田の怒りが正当なものであるとする充分な理由になるのではあるまいか。
かばったはずの深山に誤解され、非難されてしまうとは、倉田も哀れである。
そのとき、軽く押されてよろめいて、深山が頭を打ったのは、神の思し召しかもしれない。ちなみに、深山は軽症であった。

（文責：高木琴子）

そして、不鮮明な僕と倉田の写真が添えてあった。どう見ても、ただ教室で話しているようにしか見えない構図だったけれど。
僕の中で、今、いろんな感情が渦を巻いていた。
申しわけないのと腹立たしいのと笑い出したいのと泣き出したいのと。
とにかく、全部混じりあっちゃって、コロイド溶液みたいに不透明な感情。中から外は見えないし、外から中も見えないし。
やりきれない、っていうのは、こういうことを指すのかもしれない。もう、どうしたらいいかわからなかった。
時計を見る。

七時四十分。
この時間、琴子は教室にいるはずだ。
僕は、新聞をまるめて棒状にした。握りつぶさんばかりに力をこめつつ、足音も荒く教室に向かう。
バンッ、とドアを開けて教室に入る。琴子は席について本を読んでいた。
そのまま琴子の前まで行き、新聞を机に叩きつける。
「あ、おはよう」
本から顔を上げ、何事もなかったかのように琴子は微笑む。
「おはようじゃないよッ！　なんなんだよ、この記事！」
中世的な高い声をめいっぱい低くして怒鳴りつける。
迫力がないのは承知の上だけど、スピッツみたいにキャンキャンわめきたくはなかった。
「よくできてるでしょ？　これでも、好意的に書いたのよ。もっと下品な見出しをつけようって案もあったんだから」
琴子は本に目を落としながら答えてくる。
「ど・こ・が・好意的なんだよ！」
「なにもかもよ。少女のように愛らしい美少年って書いてあげたじゃない」
「そんなので帳消しになるわけないだろ！」
「じゃあ、どう書けば満足するのよ。ワガママね」
「どこがだよ！　僕の主張は正当だっ！」
言い切る。僕は肩で息をしながら、琴子の返答を待った。
「あたしは新聞部員なのよ。記事を書かなくちゃいけないの。いくら文句を言われても、屈するわけにはいかないわ。わかるでしょう？」
琴子の声は、ため息混じり。
――そうだ。琴子は、中等部の頃から、報道の自由を訴えていた。どんな脅しにも屈しなかったし、真実だけを報道するのがポリシーだった。

「……ポリシーはどうしたんだよ」
僕の声には、拗ねているみたいな響きが混じる。そんな気、ないのに。
「反してないもの。あたしは本当のことを書いてるわ。少しだけ、誇張は入ってるかもしれないけどね」
顔を上げた琴子と、目が合う。
自信ありげな、それでいて僕を揶揄するような薄茶の瞳に、怒っているような戸惑っているような途方にくれているような、情けない僕が映っている。
「気づかないの？」
なにに気づけって言うんだろう。
気づいたら、僕はどうなるって言うんだろう。
――僕は、僕の気持ちを誰にぶつければいいんだろう。
「頭いいのに、バカなのね」
「優等生クン、図星だからって高木にそういうこと言うのは筋違いだろ？」
食ってかかろうとした僕に、背後から声がかかった。
振り向いて、声の主をにらみつける。
「怒った顔もカワイイねぇ。そうやって倉田に迫ったのかよ？」
今度は、別のところから。
見ると、教室にいる男子のほとんどはにやにや笑いを浮かべている。女子は、我関せずとマイペースにしているか、集まって、僕を見ながらひそひそ話をしているか。
「毎晩、同じベッドで寝てたりするわけ？　男同士で気持ちいいのかよ」
どっと、笑い声。
「ふざけるなよ！　僕と倉田はそんなんじゃない！」
教室中を見回しながら、僕は叫んだ。
笑い声は収まらない。かえって、みんなを煽っただけらしかった。
「ムキになるなんてあやし～～～」

手を叩いて喜ぶ音までも聞こえてくる。
僕は両手で耳をふさいだ。
助けを求めて琴子を見ると、琴子はくちびるの動きだけで、
「はるかを助けてあげるのはあたしじゃないわ」
と言った。
「優等生なのにヘンタイなんてサイテー」
「男同士なんか気色悪いよなぁ」
「倉田なんかのどこがいいわけ？」
「女の子がいないってならともかく、なぁ？」
無遠慮な、興味本位の視線が痛い。
教室には人がどんどん入ってきていて、それなのに、僕の味方はひとりとして存在しなかった。
その上、僕は彼らを納得させる言葉を持たない。
今なにを言ったところで、彼らは納得しないだろう。嘘だと決めつけて、僕をえぐる言葉を浴びせてくるかもしれない。
耳をふさいで目を閉じて、僕は駆け出した。
教室の外に出て、曲がった鉄砲玉のように廊下をひた走った。
何度か人にぶつかった。そのたび、顔も見ずに謝罪する。
目指すのは、屋上。
立ち入り禁止になっているあそこなら、人に会わずにすむだろう。

最近交換したばかりのフェンスにもたれてかかって、僕は空を見上げる。
分厚い雲が駆け足で空を通りすぎていく。青はほとんど隠されてしまっていた。
ハァ……と、本日何度めかのため息をつく。
今は、ちょっと自己嫌悪。
倉田は確かにやりすぎだったと思う。でも、ほかの誰がなんて言

おうと、僕だけはあんなことを言ったらダメだったんだ。
かばった相手にあんな態度を取られたら、傷つく。
僕はあのとき、そんな簡単なことさえ気づかなかった。
馬鹿としか言いようがない……。
空がにじむ。
冷たいものが頬をすべり落ちていった。
頬は熱を持っていて、涙の通ったあとだけが温度が違った。冷たさを、感じていた。
――と、半分錆びついた蝶番が耳障りな音をたてた。
入り口を見る。
立っていたのは倉田だった。ルネサンス期に描かれた聖母マリアみたいな穏やかな眼差しを僕に向けている。
謝ろうか。
倉田は許してくれるだろう。そんな気がした。
でも、今さらだ。
今さらどんな顔で倉田に話しかければいい？
前の僕と同じように？
……もし、それがベストなんだとしても、前の僕はどんなだっただろう。
どんなふうに笑って、どんなふうに泣いて、どんなふうに怒っていた？
思い出せなかった。
僕はなにも言わず、倉田の横をすり抜けて、その場を去った。
――僕は、逃げ出したんだ……。

## 4、涙をふいて

「あ、大丈夫？」
声からして、真郷さんだろう。
ぶつかった拍子にメガネを落としてしまったから、顔は判別できなかった。
「大丈夫です、すいません」
背中にまわされた手を失礼にならないようにほどいて、僕はぺこりと頭を下げた。
――ぺき。
あぁ。イヤな予感。
頭を下げるために一歩さがったのが悪かった。足の下に目をやる。予感は、的中。
拾いあげると、メガネにはひびが入っていた。プラスチックだから、とりあえず新しいのを用意するまでは使えそうだけど……あとで洗いに行こう。
「どうしたのかな？　目、赤いけど」
メガネのことに触れないでくれた真郷さんにちょっと感謝。それを言われたら、みじめなだけだから。
「いえ……」
でも、泣いていたわけを話すのもいやだった。うつむいて、言葉をにごす。
「なんでもない分けないよね？　そういう顔してる」
真郷さんは僕のおとがいに手をかけ、顔を上向かせた。
「こんなところで立ち話もなんだし、保健室においで。その顔のまま教室に戻りたくないでしょ？」
僕はうなずいた。
「だったら、行こう。授業一時間くらいサボったって、深山くんなら平気だろうし」
真郷さんが手をさしのべてくる。
応急処置って言うことで、メガネをハンカチでふいてかけ直す。
ようやくはっきりとした輪郭を得た真郷さんに向かって、僕は手を

差し出した。
華奢に見えるのに、真郷さんの手は大きかった。

＊

ちょうど、一校時終了のチャイムが鳴り響いた。
なんだかわくわくしている自分に気づいて苦笑する。授業をサボったのなんてはじめてだ。
「災難だったね」
真郷さんは僕に背を向けていた。
とは言っても、話を適当に聞いているわけじゃない。僕の顔を見ないようにしてくれているんだと思う。
「今日はこのままここにいる？　具合が悪いってことにしてあげてもいいよ」
「いいんですか？」
「いいのいいの。保健室は心のケアもするところだから」
反動をつけてイスを回し、真郷さんは笑いかけてくれた。
「それに、そんな顔した深山くんを放り出したら、きみのダーリンに殺されちゃうよ」
「真郷さんまで！」
「ごめんごめん。深山くん、あまりにも可愛いから、ついいじめたくなっちゃって。あ、そのベッドで寝てていいよ。カーテン引いちゃえば、中に誰がいるのかなんてわからないし」
その、ついでいじめられる方はたまったものじゃない。
そうは思ったものの、真郷さんは僕に気を遣ってくれてるんだろうし。
にへら、と笑ってうなずいた。
カーテンを引いてベッドの中にもぐりこむ。
僕は寝つきがいい方だから、こんな状況だっていうのに、すぐに眠ってしまった。

＊

――黒。一面の闇。
ここはどこ？
質量を持ったじっとりまとわりつくような闇が、僕を包んでいる。
辺りを見まわしても、ここには僕ひとりしかいない。
どこまでもどこまでも、続いていく、黒。黒。黒！
なんだか、息がつまりそうだ。
「おまえ、あの倉田の恋人なんだって？」
高みから、嘲笑とともに言葉が投げつけられた。
僕は声のした方を見る。
けれど、そこにあるのは、闇。
「やっだぁ、深山くんて、変態だったんだぁ」
今度は、下から。
「ヤバイ人でしょ、それはっ！」
「男子校ならともかく……」
「病気じゃないのぉ？」
「いやぁっ、不潔！」
声は、さざなみのように押しよせて。
耳をふさいでも、膝を抱えてうずくまっても、笑い声や嘲り声は消えなかった。
かえって、僕を痛めつけようとでもしているみたいに、声はクレッシェンドしていく。
どうして僕がこんな目にあわなくちゃいけないんだろう。
僕はなにも悪いことなんかしてないのに。
どうして？
どうして？
たしかに僕はなにもしていないし、その意味では無実だけれど。
誰が罪悪だって決めたんだろう。

本当に、それは罪なの？
「バカみたい！」
「やっぱ、どこかおかしいんだよな、こいつ」
「気持ち悪い～！」
「やだ、近寄らないで。菌がうつっちゃう」
僕を包む、嘲笑。
針のように刺してきて、僕を穴だらけにする声たち。
ああ、僕が崩れていく。
指先から。乾いた泥人形のように。
さらさらと、さらさらと。
このままこんな中にいたら、僕はきっと消えてしまう。
細かな塵のようになって、風に吹かれてばらばらになって。

＊

目を開けてはじめに飛びこんできたのは、白。
闇じゃなく。
保健室の天井だった。四方にめぐらされたカーテンのおかげで、四角く切り取られている。
今、僕を護ってくれているのは優しい膜だった。
さらり、と布がこすれあう音がして、かたわらに気配が生まれた。
「……誰……？」
もれた声は、自分でも驚くほどかすかなものだった。
相手は答えない。
見ると、彼がこの前ぶつかったのと同じ人だってことがわかった。
メガネのない状態だと、相手の顔じゃない部分で個人を判別する。
メガネをかけたままだったら、彼だってことに気づけなかったに違いない。
「あの……この間はありがとう。急いでたから、お礼も言わないで……」

彼の表情がやわらかくなった気がした。
でも、それはすぐに曇ってしまった。
彼は手を伸ばしてきて、僕の目許をぬぐってくれた。
「あ……」
そうされてから、僕ははじめて、自分が泣いていることに気がついた。
「ごめんね、ありがとう……もしかして、ここに寝に来たの？　だったら、開けるよ？」
なぜか、ここの保健室にはベッドがふたつしかない。しかも、だいたい、埋まっている。だから、僕みたいなのが寝てたら、本当は迷惑なんだ。
それに、なんとなく気恥ずかしかったし。
僕は起き上がる。メガネを探して手さぐりしながら、乾いた笑い声をたてた。
彼が僕を押しとどめた。
そうして、彼の方が去っていく。
去りぎわ、僕の手にハンカチを握らせて。
声もかけられなかった。僕は、彼が通ったあと何事もなかったかのように閉じてしまったカーテンを見つめた。
彼の渡してくれたハンカチは、青い無地で、すみにT．Kと刺繍してあった。
このイニシャル、有名なプロデューサーと同じだ……。
くだらないことを考えながら、僕はそのハンカチで涙をふいた。

## 5、眠れない夜

人目につかないように、僕は校舎の裏手を急ぎ足で歩いていた。
結局、僕はあのあとまた寝ちゃって。
放課後までぐっすりと。
一日サボったことになるわけだけれど、真郷さんが適当な理由をでっちあげてくれたらしい。本当はいけないんだけど。ナイショだからね、って笑って。
そんなわけで、僕はこっそり寮に戻る途中。
と、物陰に猫が集まっていくのが見えた。鳴き声がする。
近頃、野良猫にエサをやる人がいて、おかげで猫が住みついて困るって、誰だったか、言ってたっけ……。
そんなことを思い出した。
このまま行くと、猫たちが集まっている場所の前を通ることになる。僕は昔から、猫とか犬には追いかけられたりすることが多いから、あんまり気が進まない。
エサを食べてるってことは、静かに行けば平気だよね。
自分に言い聞かせながら、今まで以上に忍足で歩く。
通りすぎるとき、首を伸ばして物陰をのぞきこんだ。
――！
十匹以上の野良猫に囲まれ、倉田が微笑んでいた。
まさしく、花のような微笑。
これを人間相手に見せたら、きっと、イメージも変わるのに……。
もったいない。
そう思わずにはいられなかった。
もし、あんな顔で僕に笑いかけてくれたら……。
僕は、ハッとする。
今、なにを考えてた？
いつのまにか立ち止まっていたことさえ、僕は気づかなかった。
身じろぎしたその瞬間、小枝を踏んでしまう。
その音に、倉田が僕の方を見た。
顔からは、あの微笑みは消えていて。

いつものような無表情が広がっていく。
僕の視線と倉田の視線が絡みあう。
なにをしていた？
そう問いつめてきているみたいな、倉田の視線。
鳥肌が立った。
背中に氷を落としこまれたみたいな悪寒がはしる。
僕は肉食獣の前に立たされた小動物のように硬直していた。もう、指先でさえ、１ミリも動かせそうにない。
いっそ、倉田が叫んでくれたなら、僕は逃げ出すキッカケを得たかもしれない。
でも、ふたりの間に横たわるのは沈黙の川だった。
「にゃあ」
いつのまにか、僕の足もとに白い仔猫がすりよって来ていた。僕を見上げ、何度か鳴く。
魔法は解けた。
僕は走って逃げ出した。振り返らずに。
うしろから倉田の視線が追いかけてくるのを、僕はいつまでも感じていた。

部屋に駆けこむと、僕はかばんを放り出した。
制服を脱ぎもせず、ベッドの中にもぐりこむ。
多少しわになってもかまわなかった。どうせ、明日は土曜日、クリーニングにでも出してしまえばいい。
そんなことよりも、僕には考えなきゃならないことがあった。
考えたくもないことだけれど。
きっと、僕はあの記事に影響されているだけ。
少したてばもとの僕に戻れる。そのはず。
そう思おうとすればするほど、僕の中で疑念が膨らんでいく。

もしかしたら、僕は本気で倉田のことが……。
そんなの、困る。
だって僕は男だ。もちろん、倉田だって。
世の中にはそういう人たちがいるってことはわかっている。偏見はないつもりだった。
でも、自分がそうだとなると話は別。
だって、そんなの。
僕だってもう高校生で、恋愛だとかそういうのが、好きだとか……それだけじゃないこと、知ってる。
それだって困るし、なによりまわりの目が気になる。
クラスのみんなは、僕のことをなんて言うだろう。
やっぱりあの夢みたいに、変だとか罵ったりするかもしれない。
病気だって言われるかもしれない。
今は海外にいる両親だって、なんて言うかわからない。
可愛がってくれているだけに、反動が大きいってこともないとは言えない。
頭の中はぐちゃぐちゃだった。
あとからあとから浮かんでくるのは、悪い考えばっかりで。
いい方へ考えるなんてできそうになかった。
気づいてなかったけど、実は僕ってペシミストだったんだなぁ……なんて思う。
そのうちに夕方になって、倉田が戻ってきて、夜になった。
でもそんなことはほんの些細なできごとだった。
生まれてはじめてすごした、眠れない夜っていうやつに比べれば。

## 6、言霊使い

東の空が白みはじめる頃、僕は起き出した。
倉田はまだ眠っている。こんな早くには、ほとんどの生徒が眠っているだろう。
昨日の今日で、倉田と顔をあわせづらい。それになにより、あの記事のせいで好奇の視線にさらされるだろうってことがわずらわしい。
今はそっとしておいてほしい。
僕は自分のことで手いっぱい。だから、人の好奇心を満たすために相手をしてあげるなんて真似、できそうになかった。
もし誰かに訊ねられたとしたら、癇癪を起こすに違いない。
部屋にこもっていようにも、ここには倉田がいるわけで。
そんなわけだったから、僕は、土日は自宅ですごす気でいた。
帰省届をポストに放りこんでおけば、とがめられることもない。意外と、聖都の規則はゆるい。特に、外泊は外泊でも、自宅に泊まるわけだから、手続きはことさら簡単だった。
荷物をまとめ、帰省届を書いてしまう。
あとは、出ていくだけ。
僕は、昨日から着たきりの制服から普段着に着替えた。制服は荷物の仲につめる。家に戻ってから、クリーニングに持っていこう。
倉田の机の上に、自宅の住所と電話番号を書いたメモを置いた。なにかあるとは思えないけど、万が一のため。これで、連絡は取れる。
部屋を出てドアを閉めるとき、ちらりと倉田のベッドを見た。
倉田はまだ寝ているようだった。
起きだしてくる気配は、ない。

＊

学園前から出ている始発バスに乗った。

朝の五時二十六分。
さすがに、こんな時間に住宅地へ行くバスに乗るのは僕ひとりだった。
僕は一番うしろに座った。ディパックを横において、思いっきりだらんとなる。
プライヴェートスペースであるはずの寮の部屋より、バスの中のほうが落ち着くなんて。
ちょっと情けなかった。
ゆっくりと流れていく景色を見ながら、倉田はどんな顔をするだろう、なんて考える。
朝、目覚めたときに、僕の姿がなかったら。
驚くだろうか。
それとも、いつもみたいな無表情のままだろうか。
まさか、僕を追いかけてきたりはしないだろう。
現実はそこまで少女マンガちっくじゃない。
第一、追いかけてこられたって困るばかりだ。
倉田になんて言えばいい？
まさか、僕は倉田を好きかもしれないなんて言うんだろうか。
そんなこと、できるわけがない。
でも、もし、できたら。
一緒に出かけて、僕がよく行く店をのぞいてみたり。
紅茶のおいしい店を教えて、ロイヤルミルクティーをごちそうしたり。
夕食はうちで食べよう。ガスは使えないけど、電気で動く調理器具って意外とたくさんある。そこそこ料理はできるから、あの無愛想な倉田がびっくりするような料理を作って。
想像するだけなら自由。
僕は想像力っていう翼をはばたかせて、どこまでもどこまでも飛んでいける。
ふと、目の端に黒いものが映った。

焼け焦げた家が、目の前を通りすぎていく。
あれは木村さんの家だ。
でも、おかしい。木村さん一家は、そろって九州に行っていて、今は誰も住んでいないはずだった。
隣近所も少しこげてはいたけれど、どう見ても、火元は木村さんの家だった。
バス停に着いたから、僕は一旦思考を中断した。

直線の多い、綺麗に舗装された道路。
周囲の家は新しい。そして、そこには幸せに満ちた家族が暮らしている。
新興の住宅街であるここは、僕にとっては故郷だった。
一番古い家でさえ、建てられてから十年も経っていないというのに。
見慣れた道をゆっくりと歩きながら、僕は遠くなった気がするこの場所の空気を胸いっぱいに吸いこんだ。
僕が寮に移ってから、まだそれほど経っていない。
それなのに、ここを懐かしく感じるのは、どうしてだろう。
「やだなぁ……僕、老けこんだみたいだ」
誰にともなく、ぽつりともらす。
「あら、はるちゃん？」
声をかけられ、僕は身をすくませた。
振り向くと、鈴木さんの奥さんだった。裏の家の奥さんで、僕にはよくしてくれていた。
「おはようございます。今日は早いんですか？」
「おはよう。今日は早いんじゃなくて、今帰ってきたところなのよ」
「大変ですね。看護婦さんって」
「はるちゃんはいつもそればっかりね」

鈴木さんの奥さんは豪快に笑った。全体的に小作りな印象のある人なのに、さばさばしてきっぷのいい人だ。姐御、なんて呼びたくなる。
「でも、どうしたの？　聖都の寮に入ったんじゃなかったの？」
「そうなんですけど、たまには家を掃除しなくちゃいけなくって」
理由はそれだけじゃなかったけど。
でも、嘘は言っていない。
「はるちゃんひとりだものね。日本に残っているのって。でも、気をつけたほうがいいわよ」
鈴木さんの奥さんが、声を低くして、人目をはばかるように僕の耳に顔を近づけた。
「なにかあったんですか？」
「ええ、最近ね、放火が増えてるの。ほら、バスから見えたでしょ、木村さんち」
僕の脳裡に、焼けこげた木村さんの家が浮かんだ。
ボヤだなんて生やさしいものじゃなく、全焼していた家。
まだ新しくて、白い壁や生垣がぴかぴかしていたのに。
「しかも、留守宅ばかり狙っているの。長期間留守にしているような家をね」
「そうなんですか……。じゃあ、うちも気をつけないといけませんね」
「まあ、気をつけたってどうにもならないものかもしれないけれど。不安がらせちゃったかしら？」
「いえ、そんなことないです。知らないよりは知っていた方がいいですから」
「本当にいい子よね、はるちゃんって。ね、うちでお茶でも飲んでいかない？」
「そんな……悪いですよ。今、帰ってきたところなんでしょう？」
この人はいい人なんだけど、話が長いのが玉にキズ。捕まったらしばらく離してもらえないから、僕は必死に断った。

「そんな、遠慮なんかすることないのに」
あからさまに落胆して見せる鈴木さんの奥さん。
でも、これがこの人の作戦だから、油断したらいけない。
「ひとりで掃除しないといけないので……早くはじめないと終わりませんから。すいません」
「そう？　それじゃあ、また顔見せに来てね」
まだ、鈴木さんの奥さんは名残惜しそうにしている。
「ええ」
僕は頭を下げて、大急ぎでその場を去った。
「あの人も、長話さえなければいい人なのに……」
ぼやきながら時計を見た。六時ちょうどだ。
「午前中、めいっぱい働けば終わるかな」
そしたら、午後はどこかに行こう。こういうときは、身体を動かしていた方が気がまぎれていい。
「今日はがんばらなくっちゃ……」
僕は思いっきりのびをした。
そのとき、家が見えてきた。
白い壁に赤い屋根の、三人で暮らしていくのに充分な大きさの家が、僕の家だった。
少女趣味かもしれない。でも、この家が好きだった。
敷地内に入っていくと、甘い香りがした。母さんが植えた花の香りだ。
家は、猫の額みたいな庭を通って玄関まで行くような造りになっている。
庭は誰も手入れをしないから、雑草がはびこり放題だ。踏み石も草で覆われている。
それなのに、雑草にも負けず、花は咲いていた。雑草の中に埋もれながら、チューリップだとかマリーゴールド、ライラックが顔をのぞかせている。
「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、あるじなしとて春を忘るな……」

ふと、和歌が浮かんだ。
ここの花たちは、主がなくても春を忘れていない。なんだか健気だ。
雑草に靴を埋もれさせながら、庭の中を歩いていく。
やっぱり、人がいなくたって、ここは僕の家だった。踏み石の感触も、鍵を開けるときの音も、全部記憶の中にある。
「うわ、埃くさい……」
家に入ると、鼻がむずがゆくなりそうな埃のにおいでいっぱいだった。
久々に新たな風が吹き込んだから、積もっていた埃が舞い上がったのかもしれない。
僕には、鼻をつまんで、極力風をたてないように歩くほかなかった。

＊

僕の目の前に天使さまがいた。
光の加減によって虹色の光輝をおびる白い翼は、どんな鳥のそれよりも優雅だ。
この上もなく上品なドレープのかかった白い服が、天使さまの美しさをいっそう引きたてている。
ゆるやかに波打つ、月光を縒ったかのような金髪は、下の方にいくにつれて色がうすれ、ついには空間と同化していた。
肌は白く、まるで白磁みたいだ。くちびるは甘やかな桜色。
そして僕を見つめる瞳は、コーン・フラワー。深みのある、僕なんかの語彙じゃ到底言い表せないブルー。
かの人はたおやかな微笑みを浮かべ、僕の前に膝を折っているのだった。
「そなたは、罪人ではない」
天使さまの声は、上も下もわからない光に満ちたこの空間に広が

り、はじけ、響きわたった。
「されど、そなたが望むのならば、我は罰を与えねばならぬ」
むだなものが削ぎ落とされて行くかのように、天使さまの表情が厳しさを増していった。
「……そのとおりです。神は、同性を愛することを禁じられました。僕は戒めを破ったのです……」
他人の身体を借りているみたいな感覚だった。僕の口が勝手に動いて、僕の声で言葉をつづる。
「我にはもはやなにも言えぬ」
天使さまが立ち上がった。桜貝のように色づいた爪がついた指で僕を指しながら、悲しい翳りをおびた声で高らかに言った。
「これが我の最後の優しさ。覚えておくがよい、迷える子よ。神は愛を禁じられてはいない」
天使さまの指先に、まばゆい光の球が生まれた。
それは周囲を喰らうように膨張していき、やがて僕を包みこんだ。
身を焼かれるかと身構えていたのに、予想に反し、光は熱を持っていなかった。
ただ、じわり、じわりと、僕の体内へと浸透していく。
そして、光は僕を変質させていった。
人ではない、生きものへと。

羊水の中に浮かんでいるかのような、穏やかで幸福な微睡みの中。
僕は四肢を縮こまらせて、僕を守る優しいものに包まれ、浮かんでいた。
だんだんと手の感覚が消え、足の感覚が消え、隙間にもぐりこむみたいにして別の感覚が入ってくる。
僕は魚になっていた。
小さな魚だった。

これのどこが罰だって言うんだろう。
そう考えたとたん、僕を囲む水が暖かくなったような気がした。
――暖かいというより、熱い。
気づくと、そこはもう水中じゃなかった。
僕はたき火の中に放りこまれていた。
くべられた小枝がパチリ、とはぜる。
炎の舌が僕をあぶっている。
いっそ、一瞬で焼いてくれればいいのに。
炎は僕に触れるか触れないかっていう絶妙な距離で、僕をさいなむ。
熱くて熱くてたまらない。
ああ、誰でもいい。
誰でもいいから。
誰か。
僕を解放して――

＊

「これが、これが罰だってこと！」
自分の叫びで目が覚めた。
「なんだ……夢か……」
安堵したのもつかの間。
熱はまるで本物みたいにリアルで、僕は焼かれてしまうかと思った。目を覚ました瞬間、そう思ったのだけれど。
夢じゃ、ない。
たき火なんかとは比べものにならない炎がそこかしこで踊っている。
「っ……！」
悲鳴をあげようとして煙を吸いこんでしまう。僕は盛大にむせた。
立ちのぼる煙で目鼻が痛い。

「どうして……」
ハンカチで鼻と口を押さえながらつぶやく。端にT・Kの刺繍がある――あのとき、借りたものだった。
僕は掃除のあと、疲れて自分のベッド眠っていたはずなのに。どうして、炎の中にいるんだろう。
うちはガスを止めてあるし、火が出そうなものはないはずなのに。
僕はのろのろと立ち上がった。
窓を開けて、身を乗り出す。中に比べれば新鮮な空気が、肺の中に流れこんでくる。
僕が顔を出している窓の方は、まだそれほど燃えていない。裏手から火が出たらしい。
庭が燃えてなくってよかった……。
ああ、そんな場合じゃない。早くここから逃げ出さないと、僕まで黒こげになってしまう。
と、ドアに向かって走ろうとしたそのとき。
ドアが燃えあがった！
木でできたドアは、すぐに炎に包まれる。
僕は後退した。ふたたび窓から身を乗り出す。
「誰か、消防車を呼んでください！」
煙が、熱気が、鼻から口から、とにかくあらゆるところから侵入してくる。それさえも気にせず、叫んだ。
ひりつくのども、しょぼしょぼしてきた両目も、できれば休ませてやりたかったけれど、それはできないことだった。
「消防車はもう呼んである！　ヤケを起こしたりしないで、そこで待つんだ！」
野次馬のひとりが叫び返してきた。
ありがとう、とその人に向かって返したかった。けれど叶わず、僕は口許をハンカチで押さえ、その場にへたり込んだ。
煙も熱気も、上へ上へとのぼるから、火事のときはできるだけ身を低くしておいた方がいい。

それに、立っていられなかった。膝が笑っている。
怖い。
本当は、半狂乱になってしまいたいくらい、怖い。
僕を支配しているのは恐怖で、それは今も理性とせめぎあっている。ぎりぎりのところで、理性が勝ってはいるけれど。
「助けて……誰か……」
くぐもった声。決して、外には聞こえないつぶやき。
弱気になっているところを悟られてはいけない。外にいる人たちは、みんな僕とは顔なじみで、わざわざ心配してきてくれているんだから。
僕は、片腕で自分を抱きしめる。
涙がぽろぽろこぼれた。
煙のせいか、それともほかのなにかのせいか。僕にもわからなかった。
――でも。
心の中で、僕がささやく。
でも、ここで焼け死んでしまえば、お前の気持ちは人に知られずにすむ。
そんなくだらない考えが、むくむくと頭をもたげてくる。
あんな汚らわしい想いを、他人に知られるくらいなら。
いっそ、死んでしまおうか――？
「なにを考えているんだ。ぼく……」
自分を叱咤する。弱い自分をぬぐい去るために。
「深山っ！　いるんだろ？　返事しろッ、深山！」
聞き慣れない、それなのに懐かしい声が耳朶を打つ。
僕は袖で顔をこする。
それから、重い体を持ち上げて窓に身を預けた。
野次馬たちの少しうしろ、夕陽を浴びて、倉田が立っているのが見えた。
灰色のパーカーを着て、一生懸命走ってきたのがひと目でわかる

顔をして、背筋を伸ばして立っている。
「いるよ、倉田、僕はここにいる！」
叫ぶ。
もう、煙も炎も怖くない。
倉田が、来てくれたから。
夕陽に照らされた倉田の顔が、歪む。不機嫌そうに見えるけれど、あれは嬉しいときにする表情だ。
あのとき、猫に見せていたような、優しい微笑みではないけれど。
それでも、僕には充分だった。
嬉しいよ、倉田。
どうしてここにいるのかわからないけれど。
今、ここにいて、僕の名前を呼んでくれた。
封じていた声を僕のために解放してくれた。
それだけで、もう。
「――消えろ！」
にじんだ倉田の輪郭が、瞬時に鮮明さを取り戻した。
いったい、それはどういう意味？
言葉を反芻するより前に。
熱気と煙があとかたもなく消えた。
つまりは、炎が。
家を蹂躙していた火が消えてしまったのだ。
どういう理屈かはわからない。
なにが起こったのかなんか知らない。
でも、これは倉田のしわざだ。
僕は、半分焼けているのに熱くないドアを開け、階段を駆け降りた。
途中、メガネが落ちてしまう。
だけどそんなことはどうだっていい。
僕はとにかく走った。
ドアの鍵を開けるのももどかしく、歓喜に震える手でつまみをひ

ねる。
扉に体当たりするようにして、僕は外へと飛び出した。
「――倉田っ！」
素足に芝生がちくちく痛い。
僕はそれでも走った。
人をかきわけ、アスファルトを蹴り、灰色のパーカーを着た人物に抱きつく。
「――深山」
僕を呼ぶ優しい声。
背中にまわされた暖かい腕。
彼の胸に耳を押し当てると、トクトク早い鼓動が聞こえる。
そして、僕の胸でも同じように、トクントクンと心臓が時を刻んでいる。
倉田は僕の顔を上げさせた。そして、目許をぬぐってくれる。
「倉田巽――T．Kは倉田だったんだ」
保健室で会った、ハンカチを貸してくれたあの人。
あのときと同じようにして僕の涙をぬぐってくれる手で、僕は倉田があの人とイコールだって確信した。
考えてみれば、簡単なこと。
倉田は、僕が遅刻したあの日、教室にいなかった。
倉田は、よく保健室に行っていた。
体格だってぴったりだ。
そして、イニシャルもT．K。無地のハンカチなんて、倉田らしいじゃないか。
「ありがとう……」
倉田は、返事をしなかった。
でも、優しい雰囲気をにじませていた。
倉田にもたれかかったまま、僕は意識がうすれていくのを感じていた。
心地よい、暖かな眠りの中へ、僕は緩やかに落ちていった。

## 7、砕けたグラスハート

僕はゆっくりと目を開けた。
目に入ってきたのは、白。
まさか、ここは天国？
僕は目をしばたたかせる。
「ここは――？」
返ってくる声はない。
つまり、僕はひとりってことだ。
手を伸ばして、いつもメガネが置いてある辺りを探る。
指先に冷たい感触があった。そっとつかんで、目の前に持ってくる。
僕のメガネだ。落としたはずなのに、きれいで、まるで新品みたいだった。
メガネをかけて、目の前に手をかざす。
「――大丈夫、ちゃんと見える」
細い指がはっきり見えた。ちゃんと五本そろっている。
ゆっくりと上体を起こして、辺りを見まわした。
左腕には針が刺してあって、そこから伸びたチューブが点滴につながっている。
僕が着ているのは糊のきいた白いパジャマで、左袖がまくり上げられていた。
寝ているのは白いベッド。白いシーツと白いかけぶとんが潔癖そうな印象がある。
壁も一面白で、ドアがひとつと窓がひとつ。窓の外には、固いつぼみをいくつもつけた桜の木が見えた。

窓際には背もたれのない丸イスがひとつ、所在なげに置いてある。
壁をたどって僕の真横に目を移すと、小さなテーブルがあった。そこにメガネが置いてあったらしい。白い花瓶に薔薇とかすみ草が生けてあった。
しっとりと濡れているみたいな色つやの真紅の薔薇は、数えてみると四十本もあった。この季節、こんな見事な薔薇を四十本も用意したら、いったいいくらぐらいかかるんだろう。
僕は自由な右手で一本抜き取り、花に顔を埋めるようにして香りを楽しんだ。
薔薇の茎はなめらかだ。棘のひとつさえない。わざわざ、棘抜きまでしてくれたらしい。心の中で、顔も知らない送り主に感謝した。
そのとき、ドアが開いた。
「はぁい♪　元気そうね、はるか」
降ってきた声に、わずかに顔をそちらに向ける。
「今、起きたトコだけど。ここ、どこ？」
「少し脳細胞が壊れちゃったみたいねぇ。病院よ、ここ」
けたけたと笑う琴子。
琴子は制服姿で、見舞い用のバスケットを抱えていた。なんだか高価そうなフルーツの。
「あたしはクラス代表で見舞いにきたってわけ。グッドタイミングだったわ、はるかが寝てたら、元気そうだったかどうかなんて報告のしようがないし」
琴子は遠慮なしに入ってきた。テーブルの上にバスケットを置いて、続ける。
「これはお見舞い。でも、それにしても災難だったわね。放火なんて」
「ありがと。家、どうなった？」
「半焼。意外と被害は少なかったわね。犯人は、倉田が捕まえたわよ」
「――倉田が？」

「ええ。救急隊員にはるかを預けて、すぐに。なんか、ノイローゼの浪人生の犯行だって」
「そっか……僕、火が消えて倉田のトコに行ったあとのこと、なにも覚えてないや」
「しょうがないわ、気絶してたんだもの。丸一日眠ってたのよ？その間、報道魂がうずいちゃったわ」
心の中で礼を言う。
面と向かっていったりしたら、琴子はきっと怒るだろう。あれでけっこう照れ屋なんだ。
「そういえば、この薔薇は誰からかわかる？」
「それは倉田から。昨日、ずっと付き添ってたのよ」
「倉田が？」
顔は、多分ちょっと赤くなっていると思う。だって、こんなに熱を持ってる。触れなくたってわかるくらい。
「もぉ、赤くなっちゃって！　可愛らしーわね、はるちゃんてば」
「からかうなよ……」
僕は上目遣いに琴子を見た。
「でも、あたしの書いた記事、まんざら嘘じゃなかったでしょ？」
と、琴子は胸を張る。
「そうだったけど……あれじゃ、クラスに居づらいよ」
「大丈夫、任せなさいって。すぐに、もっとセンセーショナルなネタ流すから。そしたら、みんな忘れちゃうわよ」
「それに、あそこまですることなかったじゃないか」
「ダメダメ。奥手でにぶにぶなんだもの、けしかけなかったらお友達どまりよ」
琴子には、勝てない。
「でも、すごかったのよ、倉田。なんか、とんでもない速さで廊下走ってくんだもの。はるかの危険を察知したのかしらね、タクシーで行ったらしいわ、はるかの家に」
「……。よく知ってるね」

「もちろん。あたしを誰だと思ってるの？」
琴子は、紅を指したみたいに赤いくちびるを指でなぞった。
「こんな情報、タダで提供してあげたんだから、感謝しなさいよね」
「するする。琴子大明神さま」
僕はおどけた。
「あ、あたし、そろそろ帰るわ。逢引邪魔したら悪いし」
腕時計に目を落とし、琴子。
「逢引って……」
「だって、もうすぐ倉田がくるもの」
琴子は去り際、軽く手を振りながら教えてくれた。
「じゃあ、またね」
ぱたん、と閉じる扉。
僕は微笑みを浮かべながら、そこを見つめた。
もうすぐ、あの扉を開いて倉田がやってくる。
きっと、いつものような無表情で。
それなのに、全身から優しさをにじませて。
小さなノックの音がした。控えめで、正確に同じ長さだけ二回。
「どうぞ」
言うと、ゆっくり扉が開いた。
はにかんだような顔で、詰襟のままの倉田が体をすべりこませてくる。カバーのかかった本と、ホワイトボードを抱えていた。
でも、嬉しそうな顔に反して、どこか疲れた顔をしている。
「ありがとう。昨日も付き添ってくれてたんだって？」
倉田は黙ってうなずいた。
また黙って……どうしたんだろう？
でも、僕は気づかないふりをして続けた。
「薔薇、きれいだよね。高かっただろ？　花は好きだから嬉しいよ」
手にしていた薔薇を花瓶に戻し、僕は笑った。
「元気ないみたいだけど大丈夫？　そこのイスに座った方がいいよ」
僕が勧めたとおり、倉田は丸イスを引っぱってきて座った。そし

て、ホワイトボードになにか書きつけて見せる。
『バラはそれほど高くなかった。
別に疲れてない。
この本は差し入れ』
角ばった楷書体の文字がホワイトボード上にあった。
箇条書き形式なんて、いかにも倉田らしい感じで、僕は吹き出してしまう。
「ありがとう。ねえ、そのホワイトボードはどうしたの？」
ちょっとむっとした様子の倉田から、本を受け取りながら訊ねる。
『久保』
スポンジで字を消して、倉田が書き直した。
「つまり……真郷さんからもらったってこと？　声を出さないで僕と話すために？」
倉田は大きくうなずく。
「そっか……うわ、哲学ばっかり」
相槌を打ちながら本をぱらぱらめくる。四冊全部、哲学だ。「ツァラトゥストラはかく語りき」に「死に至る病」、それから「論語」と「ソクラテスの弁明」。でも、ほかの三冊はともかく、差し入れに「死に至る病」はまずいんじゃ……。
『哲学はキライか？』
「ああ、そんなことないよ。びっくりしただけ。倉田は、こういうの好きなんだ？」
安心したような顔で倉田はうなずいた。
多分、倉田は悩んだに違いない。どんな本を持って来るべきか。
それで、自分が気に入っている本を持ってきてくれたんだろう。
自分がもらって嬉しいものを、が、人にものをあげるときの基本だから。
「これだけあれば、一年くらいは退屈しなさそう」
苦笑しながら僕は言った。
倉田が破顔する。

『帰る』
「――え？　僕、なにか悪いこと言った？」
『違う。
長い時間いると疲れる』
「つまり。僕はけが人だから、休んでた方がいいってこと？」
『やけどは軽い。
でも静養は必要』
「そっか……そうだね。ありがと、倉田。退院するまで、毎日来てくれる？」
『もちろん』
倉田がことさら大きく文字をつづった。
「じゃあ、また明日ね」
僕は笑って手を振る。
倉田も手を振りながら、名残惜しそうに出ていった。何度も何度も振り返って、まるで今生の別れみたいだ。大げさな。
でも、なんだかそれが嬉しくてたまらない。
友人として、なのはわかっている。琴子が言うみたいに、僕と倉田は両想いじゃない。あくまで、僕の片想いだ。
でも、少なくとも、倉田は僕に好意を抱いてくれている。
これもひとえに、《裏新聞》と火事のおかげだ。
僕の思いを告げる日は、きっとずっと来ないだろう。
それでもいいって心から思える。友達でいい。
ただ純粋に想うだけなら、神様も見逃してくれるだろう。
しばらくしてから、倉田が置いていった本のページをめくった。
倉田の読んでいた本だ、興味はある。
だけど。
どうも、僕は哲学だとかを読んで感銘を受けるような人間ではないらしい。
――つまらない。
僕はあきらめて本を閉じた。今度、ゆっくり攻略していこう。

＊

結局、僕は本気で軽症だったらしい。入院生活五日目にして、ついに点滴をキャスターつきにしてもらえた。

あんまり寝てばかりいるのもよくないそうで、少しくらい歩くのはかまわないとのこと。

まぁ、本当のところがどうなのかは知らない。倉田が帰ったそのあとから、ずっとごねていたのも関係あるのかもしれなかった。

そんなわけで、僕がのぞきに来ているのは売店。

駅の売店みたいに、お菓子だとか雑誌だとか、新聞、飲み物が置いてある。

僕の目当ては、暇つぶしになりそうなマンガ雑誌だ。

週刊で、そこそこ厚さがあって、印刷の汚いような。値段は安いし、読み捨てても惜しくないのがいいところの、あれ。

「そういえば、今日発売のがあったっけ……」

平積みにされているそれに手を伸ばしたが、ふと、隣に並べてある同じく今日発売の週刊誌に気になる見出しを見つけた。

誌名よりも先に、でかでかと書かれた「お手柄超能力少年！　火事を消し止める」という文字が目に飛び込んでくる。それよりはやや小さく、「その正体は倉田議員の息子？」と添えてあった。

そんなもの、普通だったら気にしない。よくある、マユツバものの記事だ。

だけど、目が離せない。

倉田って文字のせいだろうか。

気がつけば、僕はその週刊誌の方を買っていた。

まさか、こんなに早く、とは思う。

でも、あの火事を消したのは倉田だ。

そうそう信じられないことではある。でも、僕をはじめとして、見ていた人だってたくさんいる。

みんな顔見知りだし、疑いたくはないけれど。
誰かが告げたのだろう。
口の中に苦味が広がる。
週刊誌を小脇に抱え、僕はさっきより長い気がする廊下を歩いていった。
点滴のキャスターが、カラカラと乾いた音をたてていた。

＊

病室に戻って、僕はいそいそとベッドに入った。
袋を開ける手が震える。
記事が、倉田と無関係であってくれますように。何度も心の中で唱える。
目当てのページを開いた。
頭を鈍器で殴られたみたいな、衝撃。
でもそれは半ば予想していたことでもあった。
明らかに隠し撮りとわかる、詰襟姿の倉田の写真。容疑者が未成年だったりした場合にされるような、黒での目隠しもない。
窓越しの写真だった。廊下を歩いているところ。高い場所から、望遠レンズを使ったのかもしれなかった。
「なんだよこれ……」
パッと見にも、「超能力」だとか「隠し子」だとか、不穏な単語が目につく記事だ。
読みたくない。
咄嗟にそう思った。でも、知りたい。
こんなことを書かれるのは、半分はぼくのせいでもある。
あの日、家に逃げ帰らなかったら。
居眠りなんかしなかったら。
「ごめん……」
どんなに謝ってもたりない。

どんなに胸が痛んでも、だから僕は見なければいけない。
倉田の受けただろう痛みに比べれば、こんなの、どうってことない。
このところ、倉田が疲れているように見えたのは、このせいなんだろう。
だから。

＊

書いてあることのどこまでが本当のことなのか、僕にはわからない。
でも、記事の内容を端的にまとめてみようと思う。僕自身、整理がついていない。

つまり、倉田は超能力少年だってことらしい。昔、倉田が小さかった頃は、季節はずれの花を咲かせる、みたいな可愛らしい「超能力」を披露していたんだそうだ。
聖都に入ってからは、そのたぐいの記録は一切残っていないのだけれど。
そして、倉田の父親というのが、これまた有名人。今、汚職疑惑が浮上していて、バッシングのまとになっている倉田幸一郎議員が、倉田の父親なんだそうだ。
その上、倉田は私生児。倉田議員とその愛人の子供らしい。
しかも倉田議員には本妻がいる。本妻との間には子供がひとりいて、現在三歳だ。
そんな倉田が、十年近くの沈黙を破った。それも、クラスメートを救う、そのためだけに。

そういう感じのことが、無責任に書いてあった。
わざと、人々の好奇心をかきたてるかのように。
僕の名前は一度だって出ていない。でも、きっかけが僕にあることは明白だ。
入院していなかったら、僕もこの記事に彩りを添えさせられていただろう。
僕はくちびるを噛みしめた。
血の味がした。

＊

ちょうど、一週間。
僕は退院して、学園に戻ってきた。夜も遅くなってから、タクシーで。
退院の許可が下りたときに事情を話したら、病院の先生が特別ってことでこういうふうにはからってくれたんだ。親切な病院の人たちに感謝。
なんだか、有名人になったみたいだ。
裏門から入って、寮の前まで送ってもらったにも関わらず、数人、報道関係にしか見えない人たちがうろついているのを見た。
もちろん、寮監の先生に「怪しい人がいます」って告げ口してやったけど。
「あれって、倉田のことかぎまわってるんだろうなぁ……」
夜でもああだ。倉田は、気が休まる暇なんかないに違いない。
部屋に行って、ドアノブをつかむ。施錠されている。
仕方なく、自分で鍵を開けて入った。
びちゃ、と。
中に足を踏み入れた瞬間、水入りバケツが落ちてきた。頭から水

をかぶって、僕はびしょ濡れになる。
しかも、部屋の中は電気さえついていない。
まだ、夜九時だっていうのに。
「どういうことだよ、倉田！　説明しろよ！」
うしろ手にドアを閉めて叫ぶ。
とたん、部屋中の明かりという明かりがともされ（ルームランプから懐中電灯にいたるまでだ！）て、ばつが悪そうな顔をした倉田が、ベッドの毛布をはねあげて出てきた。
「……倉田？」
僕は静かに訊ねた。もう、それほど怒ってはいない。
ただ気になった。
たった一週間の間に、いったいなにが起こったのかが。
「どうしたんだよ」
倉田は応えない。
倉田は、ここ数日、見舞いに来てくれていなかった。僕はそれを、単に忙しいんだろうなんて、好意的にとらえていたのだけれど。
どうしてこんなになるんだろう。
そう思わずに入られない変化を、倉田はとげていた。
頬はこけ、色は不健康なほど白くなっている。目は落ちくぼみ、くまができ、その上生気を失っていた。髪の毛だってぱさぱさしていてつやがない。
立つ姿勢も悪くなっていた。人目を忍ぶみたいに、体を折りまげている。
「もしかして、取材攻勢、そんなにひどく……？」
倉田は、ためらいがちにうなずいた。
僕は吐き気がこみ上げてくるのを感じた。
こんなふうになるってわかっていたら、絶対、入院なんてしてやしなかったのに。
すぐにでも通院に切り替えてもらって、片時もはなれずに倉田のそばにいただろう。

水の冷たさも、重さも、もう気にならなかった。
帽子みたいに頭にかぶさっていたバケツを放り捨て、僕は倉田を抱きしめた。
強く、強く。

8、それでも？

倉田はふらりとどこかへ行ってしまっていた。
というか、朝になると消えていた。
『隠れる』
とひとことだけの書置きがあったから、きっとどこかに隠れているんだろう。

僕も、学園に戻ってきた以上、倉田ほどではないにしろ、いろいろと面倒なことになりそうな気がする。
でも、これ以上授業をサボるのもどうかと思う。
二段ベッドにはつきもののはしごに座って天井を仰いだとき、机の上に置いてあるＰＨＳが単調なメロディを奏ではじめた。
ＰＨＳは入学祝にと両親から贈られたもので、曲は琴子に入れられた「Ｉｔ' ｓ ｓｍａｌｌ ｗｏｒｌｄ」。
今は小学校の副教本にも載っている（とは言っても、翼をくださいや贈る言葉まで載っているわけだから序の口だけど）小さな世界のサビの部分がリピートされる。
『あ、ヤッホー。おはよう、はるか。退院おめでとう』
取ったとたん、聞こえてきたのは琴子の声。よく、こんな朝からハイテンションで疲れない――
机の上の時計は、七時ちょうどを表示している。
「ああ、おはよ。どうしたんだよ、こんな朝に」
僕の声は不機嫌だ。別に、機嫌が悪いわけではなく、起き抜けはいつだってこうだった。
『うん、いいこと教えてあげようかなって思って。今ね、学園の前とか、記者がはってるから、出てこないほうがいいわよ。クラスのみんなだって興味津々』
「うそ……」
『ホントよ。悪いこと言わないから、今日は保健室登校でもしなさいよ。部屋も鍵かけてね。人に見られたくないものは、金庫に入れるとか持ち歩くとかすること』
「保健室はわかったけど……貴重品持ち歩けってどういうこと？」
『モラリストばっかりじゃないってことよ』
「……わかった」
『基本的に、自衛以外は方法ないからね、用心して』
「でも、どうして琴子がそんなこと知ってるんだよ」
『決まってるでしょ。独自ルートよ。あたしは――』

「敏腕記者、だろ？　わかってるよ」
『そういうこと。モラリストじゃないけど、常識的ではある、ね』
「はいはい。でも、ありがと。助かったよ。南京錠とかありったけ用意して、つけとく」
『気にしないでいいわよ。でも、そのうち、紅茶の一杯もおごりなさいよね』
「ケーキもつけるよ」
『やった♪　じゃ、またね』
と、琴子は通話を切ってしまう。
苦笑しながら、僕も電話を切った。
それにしても、思っていたより事態は深刻らしい。
言われたとおり、日記とかをボストンバッグに放りこんだ。病院で使っていた着替えそのほかは、机の上に重ねておく。
こんな朝早く開いている鍵屋さんを、ぼくはひとつだけ知っていた。手持ちで、いくつ鍵が買えるだろう。

＊

「おはようございます」
普段なら、保健室は八時前には開いていない。
だけど、僕のために開けてくれてるんだろう真郷さんに、ぼくはぺこりと頭を下げた。僕にはこれくらいしかできそうにない。
「おはよう」
真郷さんは僕を見てくすくす笑う。
どこか変なところあるのかな……？
僕は自分の服装を確かめるけれど、別に変なところはない。改造もしていない、きわめてフォーマルな詰襟だ。似合ってないのはわかってるけどさ。
「別におかしくはないよ。でも、今時、そこまで丁寧な子って貴重だからね」

「やだな、僕、珍獣ですか？」
僕の言葉に、真郷さんは妙な顔をした。笑いをこらえているらしい。
「猫耳なんかくっついてたら可愛いだろうね。犬のしっぽの方がいいかな？」
遠慮なく大笑いして、真郷さんはしゃがみこむ。自分の言ったことに、自分でうけてしまったらしい。
でも、僕に猫耳とか犬のしっぽって……。
笑えるけど、可愛くはないような気がする。そもそも、動物の一部を人間にくっつけて、それを見て“可愛い”って評する神経、僕にはどうしても理解できない。
「そうだ、お茶でもいれようか。紅茶と緑茶、どっちがいい？」
真郷さんは立ち上がる。僕の言葉を待つでもなく、奥の方に消えていく。
聖都の保健室は、どういうわけか専用の給湯室とつながっていたりする。そんなわけで、お茶も飲めるし、簡単な食事程度なら作れてしまう。冷暖房完備ということもあり、保健室は居住に最適な空間だった。
「僕、紅茶がいいです。できればミルクティーで」
「はーい。じゃ、ちょっと待っててね」
明るい声が響いた。
しばらくして、真郷さんは戻ってきた。白いティーセットと、砂糖瓶、それから牛乳の入ったガラスの水差しを持っている。
「悪いけど、砂糖とミルクはお好みで入れてね」
それまでぼさっと立っていた僕を丸イスに座らせ、真郷さんは机の上にティーセットを置く。
僕のそばに、カップと水差し、砂糖をよこしてくれた。自分の分は、あっちでやってきたんだろう。
「ねぇ、深山くん」
立ちのぼる紅茶の香りを吸いこみ、うっとりと目を細めながら真

郷さんが言った。
「――怖くない？　化け物が、恐ろしくない？」
返事をしようと口を開きかけ、僕はそのまま凍りついた。
真郷さんが、まるで世間話をするような気安さで言っているのは、倉田のことに違いなかった。
僕はわざと音をたてて立ち上がる。
まだ湯気をたてているティーカップをつかみ、真郷さんに向かって投げつけた。
「もう二度と、僕の前で彼を化け物呼ばわりしないでいただけますか？」
そのとき、僕は微笑みを浮かべていた。笑みの形に歪めたくちびるから、ちょっと聞いただけでは依頼形にしか聞こえない脅迫を吐き出す。
真郷さんは手近にあったタオルで頭を軽くぬぐいつつ、場違いな笑い声をあげた。
僕はびくりとしてあとずさる。
もしかして、当たりどころが悪かった――？
そんな懸念が頭をよぎる。
「そんなに驚かなくてもいいよ。試させてもらっただけだから。さ、座って」
うながされるまま、イスに腰をおろす。ぱんぱんに張りつめた風船みたいになっていた怒りが、僕の中で急速にしぼんでいくのを感じた。毒気を抜かれたっていうか。
「どういうことですか？」
それだけ訊く。なにをどう訊ねればいいのかわからなかった。
「深山くんが倉田くんのことをどう思ってるのか、知りたかったんだ。でないと、話ができないからね」
紅茶でうすく色づいた白衣を脱ぎながら、真郷さん。白衣の下には、タートルネックの黒いセーターを着ていた。白いものを着ていたら、最悪なことになっていただろう。よかった……。

「まさか、ここまでされるとは思ってなかったけどね」
真郷さんは片目をつむり、いたずらっぽく笑った。こういう表情はえてして子供っぽく見えるものだけれど、この人に限っては違うらしい。美人はどんな顔をしていてもサマになる。
つられて僕も笑ってしまった。
「ちなみに、この話は他言無用だよ？　倉田くんにもね。ふたりだけの秘密。それでも聞く？」
「――共犯者にしてください」
「なんだかな……別に悪いことをするんじゃないんだけどね。いいけど。ドアに鍵をかけてきてくれる？」
濡れた頭をくしゃくしゃなでて、真郷さんは言った。
言われたとおりに鍵をかけ、ついでに電気も消す。
「いいね、秘密のかほりだ」
真郷さんがおどける。
「それで、話ってなんですか？」
僕は話を聞きたくてうずうずしていた。せかす。
「――ボクはね、倉田議員の主治医の息子なんだ」
にこにこと。
まるで冗談の続きだとでも言いたげな顔で言われてしまった。
「どういうことです？」
「簡単なことだよ。倉田議員は、倉田くんが邪魔だった。私生児な上に、得体の知れない力を持っている。いつの頃からか口もきかなくなってしまって世間体が悪い。だから、自分の息のかかった学校に入れたってわけ。監視をつけてね」
途方もない、僕には理解できなさそうな話だった。
一般庶民の僕には、スケールが違いすぎてなんのことやらさっぱりだ。
自分の子供を疎ましがって、学園の寮に閉じこめてしまうなんて。
そりゃ、家庭環境はひとそれぞれだけど……。
「監視って真郷さんのことですよね？」

「ご名答。賢い子は好きだよ」
と、ウインクひとついただいてしまった。
しかも、真郷さんファンが見たら絶叫して卒倒しそうな、色っぽいやつだ。
「ボクは自分から志願したんだけどね。倉田くんの主治医だったし、なにより、もぐりこむのにちょうどいい人材でもあったから」
「どうして、自分から？」
「倉田くんはかわいそうな子だよ」
さも、当然だと言わんばかりの口調だった。
「同情だけですか？　真郷さんなら、ほかにも……」
僕は首を傾げ、たたみかけるように訊ねる。
「仕事はあったさ。よりどりみどりだった。でも、ほかの何万人を救うよりも、倉田くんひとりを救ってあげたいと思った。これは理由にならないかな？」
真郷さんはふっと真顔に戻った。長く長く息を吐く。
それこそ、永遠じゃないかって思えるほどの、間。
「なーんてね。本当は、倉田くんが話さなくなったのと関係があるんだ」
それはまるで、殉教者の横顔のようで、声をかけるのはためらわれた。
なにかを懺悔しようとしているのかもしれない。色濃い苦悩が浮かんでいた。
「ボクには弟がいてね。きみたちよりふたつ下だった」
過去形で語る“弟”を、真郷さんは懐かしんでいるようだった。
両手で顔を覆い、いやいやをするみたいに首を振って、続ける。
「三歳だった。生意気盛りの頃で、弟も例にもれず、小憎たらしいことをよく言ってた。そんな子供特有のわがままさえ、ボクにしてみれば可愛いものだったよ」
そして、沈黙。
僕は身じろぎひとつせず、真郷さんが続けてくれるのを待った。

「父の仕事にくっついて、ボクはよく倉田議員の家に行っていたんだ。倉田くんの遊び相手もかねていてね。物心ついた頃から、倉田くんは魔法みたいな力を使っていた。ボクたちは三人で、鉢植えの花が咲くのを早回しで見たりしてた」

自分のカップに口をつけ、真郷さんは舌でくちびるを湿らせた。

「ちょっとしたケンカだったんじゃないかな。よく覚えてないんだけどね……『お前なんか死ねばいい』って、倉田くんが言った。弟に向かってね。弟はそのとたん倒れて、それっきり」

「そんな……」

「嘘に聞こえる？　でも、本当の話。どういうメカニズムかわからないけど、倉田くんは口にしたことをほとんどすべて真実にしてしまえるんだ。本人の意思とは無関係に」

「でも、それは倉田の罪じゃない」

ぽつり、と言葉がもれていた。

僕はあわてて口を押さえる。こんなこと、被害者の親族に向かって言うべき言葉じゃない。

「気にしないで。ボクもそう思ってるから」

僕は真郷さんの目を見つめた。

優しい黒い瞳には、ふたつの異なった感情が浮かんでいる。

愛情と。

憎悪と。

今はまだ、太陽のような愛情が勝っていた。

けれど、簡単に反転してしまいそうな危ういバランスを保っていることは、僕にさえわかった。

真郷さんは、倉田のことを、親愛の情を抱きつつも憎んでいるのかもしれない。

「でも、ちょっと許せないからね。こんなことを教えてあげるのは、倉田くんへの意地悪」

僕が首を傾げると、真郷さんも同じようにしてきた。

「どこが意地悪だって言うんです？」

「倉田くんの中で、あの力は禁忌だからね。できれば、誰にも知られたくないはずなんだ。しかも、あの力は倉田くんの中でトラウマになってるから……。事実、倉田くんは、弟が亡くなった頃から言葉を発さなくなった」

なるほど。

僕は大きくうなずく。

自ら声を封じたくらいだ。たった五歳の子供が、自分の意志でそうしたほどに、それは大きな傷だったはず。

すごいことだと思う。そうそうできることではない。

でも、僕は正しいとは思わない。

そしてそれは、真郷さんも同意見な気がする。僕の勝手な憶測にすぎないけれど。

立場や、感情や、そういったいろいろなものが真郷さんを邪魔している。だから、自分で動くことができないのかもしれない。

だからこうして、わざわざ僕に話してくれたんじゃないだろうか。

「僕が、倉田を守ります。だから、これからも力を貸してくださいますか？」

宣言する。

真郷さんは僕を抱きよせてきた。そして、優しく頭をなでてくれる。

ほろ苦い紅茶の香りがする腕だった。

それでも、僕はかまわない。

たとえ倉田がなんであっても。

ほかから蔑まれ、虐げられることがあっても。

頼りにはならないだろうけど、できるだけのことはしたい。

うぬぼれかもしれない。

でも、きっと、それは僕にしかできないことだから。

## 9、声を聞かせて

満月にはまだたりない、十三夜の月。
みがきぬかれた銀盤のようなその月が、殺風景な屋上にも、地上とわけへだてない光を投げかけている。
コンクリートの平面は、ふちをフェンスで囲まれている。空から見れば、アルファベットのHの形になっているはずだ。
一箇所、平面の上に直方体が乗っている。そこは屋上と校舎内とをつなぐ、唯一の場所だった。
僕はフェンスにもたれ、扉を眺めていた。
錆びた金属製の扉は、まだ開く気配はない。
指定した時刻は、月が一番高くなる頃合。そろそろ倉田は来るはずだった。
風が吹く。僕の髪を乱していく。
鴉がうめくような無気味な音がした。倉田が扉をくぐってくる。
「――深山」
僕を呼ぶ声は、深くて甘いバリトン。
「はるか、だよ」
訂正すると、倉田は小さくうめく。
「ホワイトボード」
が、すぐに、僕が抱えたホワイトボードを指して、倉田が言う。
返せと言いたいのだろう。でも、命令してしまったら、僕は従わずに入られないだろうから。だから、倉田はそれをしない。そのはずだ。
「返さない。僕は倉田の声が聞きたいから」
「――巽」

今度は、倉田が訂正した。
「巽、もしこのボードを返したら、また声を出さなくなるだろ？そんなの、いやだから」
倉田は困ったような顔をして僕を見つめた。
僕は倉田から目をそらし、フェンスから身を乗り出す。
「なにを！」
下には誰もいない。
僕は振りかぶって、ホワイトボードを投げ捨てた。
「はるか……」
手を伸ばせば届いたはずなのに、倉田がつかんだのはホワイトボードじゃなかった。
僕、だった。
うしろから抱きしめられるような形になっている。
僕は優しく倉田の腕をほどいて、フェンスから降りる。
「飛び降りると思った？」
下から顔を見上げると、倉田は今にも泣き出しそうな顔でうなずいた。
「バカだな……理由もないのにそんなことしないよ」
子供にするみたいに、頭をなでてやる。
「僕は、ホワイトボードが邪魔だっただけなんだ。今から、く――巽に言いたいことがあるから。返事を倉田の口から聞きたいし」
たつみ、と僕が口にするたび、倉田は嬉しそうな顔をした。
多分、今まで名前で呼んでくれるほどに親しい人はいなかったんだろう。
本当に些細なことなのに、見ている方まで嬉しくなるような、幸せそうな顔をする。
名前で呼びたいって言ったときも、戸惑いながら、今みたいに嬉しそうに目を細めていた。
「変だって思うだろうし、イヤだって思ったら忘れてくれてかまわない。それでも、僕は友達だから」

だから、正直に答えて。
倉田がのどを鳴らすのが聞こえた。
「――僕は、巽のことが好きだよ」
友達としてじゃなく。
病院にいる間も、戻ってきてからも、僕はたくさん考えた。
これは間違ったことかもしれないって。
でも、それでも変わらない気持ちだった。誰になにを言われようと、耐えていける。
僕が僕なりに考えて出した結論だった。
倉田は意味をはかりかねているのか、黙って僕を見つめている。
「友人としてじゃなくて、恋愛感情でだから」
僕がそうまで言って、やっと倉田は納得した表情になった。
でも、すぐに笑顔は翳りをおびる。
「でも」
「僕は男だから、イヤ？」
「違う」
はっきりとした、否定。
僕は重ねて訊ねる。
「じゃあ、どうして？」
しばしの沈黙。
答えるつもりがないわけじゃないことはわかっていた。倉田は、答えを探しているんだろう。自分の気持ちにあった言葉を選ぶことに、倉田はまったく慣れていない。
「僕は全部知ってる。その声のことも、どうして声を出さなくなったのかも」
「なら……」
顔をそむけた倉田の頬に手を当て、僕の方を向かせる。
倉田は傷ついたような瞳をしていた。
「それでもかまわない。僕は倉田の声が聞きたい」
倉田は目をしばたたかせる。

いつも無表情に見えていたけれど、倉田は、実は驚くほどに表情が豊かだ。
子供みたいな素直さで、僕の言葉を真摯に聞いてくれる。
思ったこともすぐ顔に出る。ただ、それを見るがわに、わずかな変化を読み取るだけの受容器がないだけなんだ。
倉田は優しすぎた。そして不器用だった。
だから、誰とも必要以上に関わらず、ひとり、沈黙の中で生きてきた。
でも、今、僕が自分から関わっていこうとしている。どんなに退いても、僕は倉田を追いかける。
今のままでいいはずがないから。
「僕の気持ちは、今日の月と同じだよ。満ちていくばかりで、細りはしない」
頭上の月を指す。
「巽」
うながす。
次の瞬間、ぼくは強く抱きしめられていた。
優しくて不器用な抱擁だった。
僕は倉田の首に腕をまわし、頬に軽くキスをする。
「これは、イエスって取ってもいいよね？」
僕が笑いかけると、倉田も笑いかけてくれる。
うなずいて、口を開きかけた倉田のくちびるに、自分のそれを重ねあわせた。
ちょっと間をおいて、僕はそっとくちびるを離す。そして倉田の胸に顔を埋めた。
ああ、赤面中。
こんなこと、もう、自分からはできそうにない。
「はるか」
倉田が耳元でささやいてくる。吐息が耳にかかってくすぐったい。
僕は顔を上げないまま、「巽」と言った。

十三夜の月と空でまたたく星々だけが観客だった。
僕たちのスタートはここからだ。
今からすべてははじまっていく。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2853c/

十三夜の月

2010年10月8日15時19分発行